

論文要旨等報告書

| | |
|---------|---|
| 氏 | 森 裕佳子 |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 歯学 |
| 学位授与の番号 | 博 甲 第 3 5 8 9 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 2 0 年 3 月 2 5 日 |
| 学位授与の要件 | 医歯学総合研究科社会環境生命科学専攻(学位規則第4条第1項該当) |
| 学位論文題名 | 小児の歯科恐怖に関する研究 -保護者回答用日本語版CFSS-DSの有用性と低年齢児の歯科恐怖の実態- |
| 論文審査委員 | 准教授 宮脇 卓也 教授 下野 勉 准教授 岸本 悦央 |

学位論文内容の要旨

【研究目的】

歯科恐怖は小児期の歯科治療経験に由来し、また集団の疾病構造や医療サービスの質を反映すると言われる。日本人小児の歯科恐怖の実態を調査し、その予防に努めることは日本の医療レベルの向上に有効であると考えられる。本研究では歯科治療の現場で対応が困難な3～8歳の低年齢児の歯科恐怖の実態と恐怖の誘因を調査するために疫学調査を行った。

【対象と方法】

国際的に認知度が高く他国で広く応用されている歯科恐怖に関する質問紙 Dental Subscale of Children's Fear Survey Schedule (CFSS-DS) を保護者回答用に改編したものをを用い調査を行った。本研究の実施にあたり対象者の保護者に研究の内容・趣旨を説明し、承諾の得られた者のみ対象とした。質問紙の回答はすべて対象者の保護者が行った。

研究1：保護者回答用日本語版 CFSS-DS の信頼性・妥当性の検証

対象：岡山大学病院小児歯科受診中の3～8歳の患児

1. 信頼性の検証(再テスト法)：待合室にて保護者による CFSS-DS 回答(1回目)終了後、同じ質問紙を手渡し自宅で再度回答したもの(2回目)を1週間以内に返信するよう依頼した。質問紙を依頼した128名中返信のあった108名(男児：53名、女児：49名、平均年齢：6.3±1.6歳)の CFSS-DS 得点の経時的安定性(1・2回の得点間の相関)と内的一貫性(Cronbach の α 係数)を検討した。
2. 妥当性の検証：ビデオカメラを用いて患児80名(男児：42名、女児：38名、平均年齢：6.1±1.4歳)の診療中の顔面表情及び体動を記録し、2名の評価者($\kappa=0.93$)が Frankl の分類に従いその行動評価を行い、CFSS-DS 得点と行動評価得点間の相関を検討した。また ROC 曲線を作成し、CFSS-DS 得点における恐怖レベルのカットオフ値を算出した。

研究2：一般集団における実態調査

対象：県内の保育園6園・幼稚園2園・小学校6校の3～8歳の園児及び児童1782名(男児：914名、女児：868名、平均年齢：6.7±1.5歳)

園児・児童の保護者に CFSS-DS、齲蝕・歯科受診経験に関する質問紙、日本語版 Dental Fear Survey (DFS)、歯科受療行動に関する質問紙を実施し、記

述統計的分析, CFSS-DS の因子構成の検討(因子分析), 恐怖の関連因子の検討(ロジスティック回帰分析), 歯科恐怖度と歯科受療行動の関連の検討を行った。

研究3: 臨床集団における実態調査

対象: 市内某歯科医院受診中の 3~8 歳の患児 422 名(男児: 212 名, 女児 210 名, 平均年齢: 5.6 ± 1.6 歳)

来院時に患児の保護者に CFSS-DS, DFS, 歯科受療行動に関する質問紙を実施した。また診療録から患児の齲蝕・歯科受診経験を調査し, 記述統計的分析, 恐怖の関連因子の検討(ロジスティック回帰分析), 歯科恐怖度と歯科受療行動の関連の検討を行った。

【結果】

研究1: 保護者回答用日本語版 CFSS-DS の信頼性・妥当性の検証

1. 信頼性の検証: 返信率は 79.7%であった。1・2 回目の得点間に有意な正の相関 (Pearson の相関係数: $r=0.78$, $p<0.001$) を認め, 高い経時的安定性を認めた。また 1・2 回目の Cronbach の α 係数はそれぞれ 0.88, 0.90 であり高い内的一貫性を示した。
2. 妥当性の検証: CFSS-DS 得点と行動評価得点間に有意な負の相関を認め ($r_s=-0.306$, $p<0.001$) CFSS-DS の基準関連妥当性が示された。また恐怖レベルのカットオフ値は 33 点であった。

研究2: 一般集団における実態調査

1. CFSS-DS 平均点は 32.1 ± 11.2 点, 男女差は認めなかった。得点の高かった項目は「注射される」「歯を削られること」「息が詰まること」であった。
2. 因子分析により他国語版と類似した 3 因子「歯科特有の侵襲性の高い事項」「医科歯科受診に共通する侵襲性の低い事項」「圧迫感や不快感を感じる可能性のある一般的事項」が抽出された。
3. ロジスティック回帰分析の結果, 「親の歯科恐怖度が高い」, 「歯科受診経験がない」, 「齲蝕処置経験がない」, 「5 歳以下」で有意に High Fear になりやすかった。また受診経験者では前述の項目に加え, 「齲蝕がある」, 「回答時歯科受診していない」で有意に High Fear になりやすかった。
4. CFSS-DS 得点と歯科受療行動に正の相関があり, 恐怖度が高いと歯科受診を躊躇する傾向が認められた。

研究3: 臨床集団における実態調査

1. CFSS-DS 平均点は 32.0 ± 11.6 点, 男女差は認めなかった。
2. ロジスティック回帰分析の結果, 「親の歯科恐怖度が高い」, 「局所麻酔経験がない」, 「5 歳以下」の項目で有意に High Fear になりやすいという結果が得られた。
3. CFSS-DS 得点と歯科受療行動に正の相関を認めた。

【考察および結論】

保護者回答用日本語版 CFSS-DS の高い信頼性と妥当性が示され, 小児の歯科恐怖及び不安の国際比較の調査において, 本質問紙は高い有用性を発揮すると考えられる。本研究により日本人低年齢児の歯科恐怖度は他国と比較すると高いことが判り, 日本の医療レベル向上のために小児期の歯科恐怖の軽減を図るさらなる研究が必要であると考えられる。

論文審査結果の要旨

歯科恐怖は集団の疾病構造や医療サービスの質を反映すると言われており、歯科恐怖の実態を調査しその予防に努めることは日本の医療レベルの向上に有効である。

本論文では、日本人低年齢児の歯科恐怖の実態を国際比較することを目的に、国際的に認知度が高く広く応用されている小児の歯科恐怖を評価する質問紙Dental Subscale of Children's Fear Survey Scheduleを保護者回答用日本語版CFSS-DSに改変し、その信頼性・妥当性の検討を行い、それを用いて一般集団・臨床集団における歯科恐怖の実態調査と恐怖の関連要因の検討を行った。

岡山大学医学部・歯学部附属病院小児歯科受診中の患児182名、幼稚園・保育園・小学校に通園・通学中の園児および児童1782名、一般開業医受診中の患児422名、いずれも3～8歳児を対象に、対象者の保護者および関係者に研究の趣旨を説明し承諾の得られたものに質問紙法による調査を行った。

質問紙はCFSS-DS、保護者自身の歯科恐怖度を評価する質問紙、齲蝕・歯科受診経験に関する質問紙、歯科受療行動に関する質問紙を用いた。

まず再テスト法を用い質問紙の信頼性の検証を、また質問紙の結果と診療中の行動評価より妥当性の検証を行った。さらに一般集団を対象に歯科恐怖の実態と関連要因について、臨床集団を対象に齲蝕・処置経験と歯科恐怖の関係について検討した。

その結果、保護者回答用日本語版CFSS-DSは高い信頼性と妥当性を示した。一般集団・臨床集団の平均点に差を認めず、男女差もなかった。恐怖の関連要因として、親の歯科恐怖度、歯科受診経験・齲蝕処置経験の有無、年齢等が抽出された。さらに歯科恐怖度は歯科受療行動に影響することが分かった。

以上のように本研究は、保護者回答用日本語版CFSS-DSの高い信頼性と妥当性を実証し、日本人低年齢児の歯科恐怖の実態と恐怖の関連要因、また歯科恐怖と歯科受療行動の関連性について新知見を示した重要な研究と考えられる。

よって本論文は博士（歯学）の学位に値すると認める。